

波々伯部〈ほほかべ〉と後川〈しつかわ〉の山争い（城東町）

今から五百年ほど前、牛馬の飼料〈しりょう〉や、田圃〈たんぼ〉の肥〈ひ〉料として、山麓〈すそ〉の草刈りが盛んだったころのことです。日置の波々伯部（辻、小中、宮ノ前、畑井、畑市、北島、井ノ上、上宿の八部落の総称）と、後川村が共同で草刈りをしていました。毎日、朝早くから牛を連れ、若い人も年寄りも、辻部落の奥山まで、川ぞいの細い道を歩いて行きました。

遠い昔から、仲よく続けて来た草刈り場ですが、今日に限ってどうしたのか、

「後川は、すえ石より向こうじゃないか。」

「波々伯部が後から来て、えらそうなことをいうな。」

「昔から、すえ石を境〈さかい〉にしとるんじゃ、波々伯部はもっと西で刈れ。」

と、わいわいさわいでいるうちに、だんだん両方の人数がふえて来ましたが、こんなさわぎは、今までに一度だってありませんでした。

「せっかく、朝早よう来たのに、これじゃちょっと（少しも）刈れん。」ぶつぶついう声がだんだん広がり、さわぎは仲々おさまりそうにありません。

もんくのいい合いをしているうちに、だんだん昼近くなりました。

気のきいた村人の中には、「この争いは、治まりそうにないので昼飯を取りに帰ろう。」と山を降りていきました。お互いに、ののしり合い、争い合っている間に、

「おーい、おーい。皆の衆、昼飯を持って来たぞ。」

息を切らしながら、一反〈たん〉ぶろしきにおひつを包んで背負〈せお〉い、手には風呂敷包〈ぶろしきづつみ〉におかずをさげて、やって来ました。それから間もなくのこと、後川の方もおにぎりやおかずが届けられました。

もう、日は頭の上を照らしています。誰いとはなしに、「腹がへつては戦〈いくさ〉がでけん（できない）昼飯にしては。」お互いが、にらみ合ったまま、おひつの周囲に集まりましたが、誰一人として笑顔の人はありません。こわばった顔つきでおにぎりを食べ始めました。後川の方も一かたまりになって、届けられたおにぎりや、おかずをたべています。

お互いに争っていても、中には親切な人があるものです。おひつに残っているおにぎりを持って、

「おーい、残ったおにぎり食べんかー。」

「こっちも、おかずがあまっとるけどいらんかー。」

残っているおにぎりや、おかずを交換〈こうかん〉している様子は、いかにもなごやかで、争いなど起しているように思えません。しばらく休憩〈きゅうけい〉してまたけんかが始まりました。

「やい、こっちは、すえ石より向うへは、いとらへんぞ。」

「早よう来たらどこで刈ってもよいんじゃ。」

「昔から境界〈きょうかい〉は、すえ石ときまっとるんじゃ。」

「そんな境界は、昔から聞いたことがないわい。」

「波々伯部は、いつでもでしゃばりやがって。」

「なに、後川がいばりやがって。」

こんな言い合いは、いつまでたっても解決〈かいけつ〉がつかえません。山の昼は短かいものです。太陽も、山の端近くになりました。寺々の鐘〈かね〉の音が、遠くに、近くに聞えて来ます。

あたりは、だんだんうす暗くなり、どちらからともなく一人へり二人へり、五人、十人と山を降りていきました。

後に残った村人も「今日は、これまで。」と、あきらめて帰っていきました。

争いは、あすに持ち越されたのです。

今では、一人として草刈りに行く人はありませんが、明治の終りごろまで続きました。

この山争いの起きた、辻部落の奥山のすえ石の辺は、すっかり雑木でおおわれてしまいましたが、水は、今も昔ながらのきれいな清水が流れています。

